

小樽の歴史的建造物を巡ろう

原風景の祝津から近代建築の縮図まで

小樽の繁栄

小樽は、明治後期から昭和 10 年代にかけてわが国屈指の港湾都市として繁栄した。とくに日露戦争の講和条約（1905（明治 38）年）によって南樺太を領土とし、またカムチャッカの漁場を得たことが、小樽港の移出入を高める大きな要因になった。その交易の基盤は、幌内鉄道であった。開拓使が敷設した手宮・幌内（三笠）間を結ぶ石炭輸送のための鉄道（明治 15 年全線開通）は、函館本線（明治 40 年開通）に発展して北海道の大動脈となり、札幌駅は中継拠点に位置づけられた。

北海道の経済の中核を担った小樽では、地域に根付く建物に加えて近代日本の建築関連のトップランナーが鉄道や港湾そして市街地の建物や施設を設計し、その建設を地元の棟梁や職人が支えた。

一方、小樽の黎明期から今日まで、漁業と加工業はまちの基礎をなす産業であり、永々と発展してきた。にしん漁の最初期の記録は 1740 年代（江戸中期）に遡り、小樽の曙を記している（「松前商賈聞書」『小樽市史 第一巻』）。

小樽の発展は、特色ある地区の成り立ちと時代の先端を走った歴史が織り成してできているようだ。歴史的な建造物の見どころとその背景を地区ごとに巡ってみよう。